

(報告)

フランス語における複合過去と半過去の使い分け —語彙アスペクトを用いた分類—

松澤 水戸

Mito MATSUZAWA

1. はじめに

フランス語の過去時制は、まず複合過去、つぎに半過去、の順番で学習することが一般的である。つまり、この2時制を同時に学習することは稀である。また、この2時制を学習するのは初級学習段階であることが多いため、2時制の機能説明には非常に典型的な例が用いられる。複合過去については、それが持つ完了アスペクトを反映した表現が用いられ、半過去についても、その未完了アスペクトを反映した表現が用いられる、といった具合である。

初級文法における複合過去の機能（例文の下線部が複合過去とその和訳、以下同様）

- ・ 現在の時点で終わっている動作・状態をあらわす
Hier, je suis allé au cinéma.
「昨日、映画を見に行った。」
- ・ 期間や頻度が明示された反復表現
Il y a eu beaucoup de grèves de janvier à mars. (斜体部分は「期間限定」)
「1月から3月までの間、たくさんのストライキがあった。」
- ・ 結果や現状を説明する過去の出来事、一連の出来事をあらわす
Ils ont tellement chanté qu'ils ne peuvent plus parler.
「彼らはあまりにもたくさん歌ったのでもうしゃべれない。」

初級文法における半過去の機能（例文の点下線部が半過去とその和訳、以下同様）

- ・ 過去のある時点で進行中の動作、状態、習慣をあらわす
Je regardais un film quand le téléphone a sonné. (下線部は複合過去)
「映画を見ていたとき、電話が鳴った。」
- ・ 過去の習慣や頻度不明の反復をあらわす
On se voyait souvent, Nathalie et moi, avant que je vende ma maison.
「私が家を売るまえは、ナタリーと私はよく会いました。」

半過去の学習時には、すでに学習を終えている複合過去と対比させ、2時制の機能の違いが明示されるので、一見、この2時制の習得は初級学習者にとってもたいして難しくなさそうだが、時制の使い分けタスクなどの成績が低いままの学習者がでてくる。様々な要因が考えられるが、結局、2時制の習得がうまくいっていないことが主原因と言ってよいと思う。なぜうまくいかないのだろうか？理由はひとつではないだろうが、ここでは、動詞自体の意味が持つアスペクト（語彙アスペクト）に注目する。語彙アスペクトと、複合過去と半過去のそれぞれの時制アスペクトとの組み合わせに関する調査を行い、この2時制の学習に、語彙アスペクトの知識が有効であるかを確かめてみたい。

2. 語彙アスペクトの3分類

本調査は、その成果を初級学習者向けの複合過去と半過去の教育に役立てることを目的のひとつとしているので、語彙アスペクトの分類については、単純ともいえる3分類を Labeau(2005)から引用した。

Labeau(2005)の語彙アスペクト 3 分類

- **Telic verb**
到達点に着くことで行為が起きる
例：sortir 「外に出る」 ← 外へ出ないと、外へ出たことにならない
- **Atelic verb**
到達点に着かなくても行為が起きる
例：écrire 「手紙を書く」 ← 手紙を書き終えていなくても、文字は書いている
- **Stative verb**
いかなる変化も含意しない
例：exister 「存在する」

語彙アスペクトの分類において、学習者へぜひ提示したい注意点がある。それは、上記の **Telic verb** と **Atelic verb** の区別には、動詞自体の意味だけでなく、動詞以外の要素、例えば、補語や文脈が影響することである。

例 1 : chanter 「歌う」 = Atelic verb

chanter une chanson 「歌を 1 曲歌う」 = Telic verb

例 2 : regarder un film 「1 本の映画を見る」 = Telic verb

Pendant que je regardais un film, 「(1 本の) 映画を見ていたら、」 = Atelic verb

3. 調査について

東京外国語大学の学部生を対象として、複合過去と半過去の使い分けタスクを実施し、彼らの回答を分析した。

3.1. 時制選択タスク

最長でも 3 文章程度のまとまりで構成されたテキストの中に動詞の不定法を提示し、それらの動詞を文脈に適合させるには複合過去と半過去のどちらの時制が適切だと思うかを判断させる問題を作成した。1 つのテキストが 1 つの問題に相当し、47 問あり、1 問につき不定法の動詞は 1~3 含まれる。この問題のフランス語はすべて、CEFR ヨーロッパ言語共通参照枠の A2 レベル準拠の教材、Glieman, M.-F.(2006). *Les exercices de grammaire A2*, Hachette Education、から引用した。この教材はフランスで出版されたものなので、日本の大学生が内容を熟知している可能性は低いと考えた。念のため、4 名のフランス語母語話者に問題の妥当性、つまり、それぞれのテキストの中の動詞について、2 時制のどちらか一方を選択できるのか、について検証を依頼した。また、ほとんどのフランス語の語彙表現には日本語の「参考語彙」を付加した。このとき、動詞の不定法、例えば、ouvrir la fenêtre について「窓を開ける」としたように、日本語においても過去形を用いなかった。これは、「今朝 6 時に起きた」、「外は雨だった」のような日本語の過去形がフランス語の時制選択に影響を与えないようにするためである。

問題例

On [1](**ouvrir**) la fenêtre parce qu'on [2](**avoir**) chaud.

参考語彙 : ouvrir la fenêtre 「窓を開ける」、parce qu' 「なぜなら」、avoir chaud 「熱い」

3.2. データ提供者

東京外国語大学の学部生のべ 127 名の協力を得た。この 127 名は、フランス語の学習時間の観点から 3 つのグループに分けることができる。

- 東京外国語大学学部生 : 3 つのグループ
 - フランス語専攻 2 年生 合計 66 名

- 学習時間：320 時間以上
 - 2010 年 5 月 20 日調査 28 名
 - 2011 年 6 月 9 日調査 27 名
 - 2012 年 6 月 12 日調査 11 名
- フランス語専攻 1 年生 22 名 (このうち 7 名が 2012 年 6 月 12 日の調査に 2 年生として参加)
- 学習時間：160 時間程度
 - 2011 年 10 月 28 日調査
- フランス語副専攻 39 名 (主専攻語は多様)
- 学習時間：54 時間程度
 - 2011 年 10 月 13 日調査
 - フランス語専攻との大きな違いは学習時間 (フランス語専攻は週 9 時間、副専攻は週 3 時間)

3.3. データ収集

回答の収集と分析を効率的にするために、2 時制の使い分けタスクは Moodle (e-learning 教材作成・管理システム) 上で実施した。Moodle では、回答を義務化し必ず 2 時制のどちらかを選ばなければタスクを終了できないように設定可能である。しかし、どちらかの時制を適当に選んで回答できるという点は解消できない。

3.4. 本調査の注目点

注目点 (RQ) として、以下の 3 点を挙げる。

RQ1：語彙アスペクトの 3 分類 (Telic、Atelic、Stative) と、いわゆる「正解の時制 (複合過去か半過去)」の 6 通りの組み合わせについて、正解率の観点から学習者の「得意な組み合わせ」、「苦手な組み合わせ」を探る

RQ2：正解率から学習者のグループ分けを行い、各グループの特徴を探る

RQ3：Labeau(2005)の語彙アスペクト 3 分類を検討する

4. 分析

ここでは、3 つの RQ の順に分析を進める。

4.1. RQ1：正解率の観点から学習者の「得意な組み合わせ」、「苦手な組み合わせ」を探る

2 年生、1 年生、副専攻、という 3 つのグループにおける、語彙アスペクトの 3 分類 (Telic、Atelic、Stative) と、いわゆる「正解の時制 (複合過去か半過去)」の 6 通りの組み合わせの平均正解率について、図 1 を見てみると、平均正解率が高い組み合わせと低い組み合わせがあるように思われる。

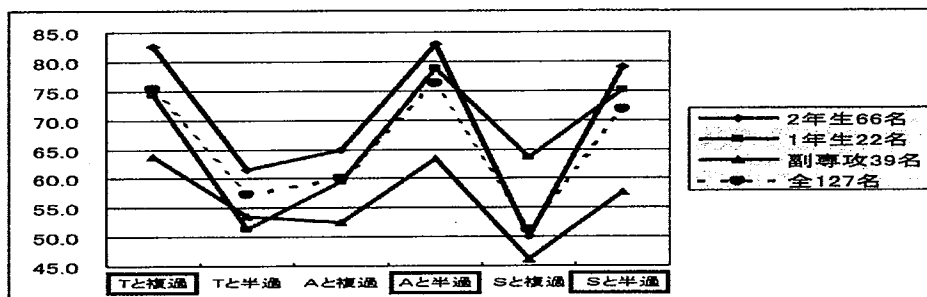


図 1: 3 つのグループにおける、各組み合わせの平均正解率

- Telic と複合過去、Atelic と半過去、Stative と半過去（図 1 の 3 つ四角囲み、T と複過、A と半過、S と半過）
→ 語彙アスペクトと時制アスペクトが同じ → 得意な組み合わせ？
- Telic と半過去、Atelic と複合過去、Stative と複合過去（図 1 の、T と半過、A と複過、S と複過）
→ 語彙アスペクトと時制アスペクトが違う → 苦手な組み合わせ？

そこで、Tukey 法による多重分析を試みた。まず、平均正解率の傾向において、グループ間で有意差が見られるかどうかを検証した。2 年生と 1 年生、2 年生と副専攻、1 年生と副専攻、いずれの間にも有意差は見られなかった。3 つのグループにおける平均正解率の傾向に「差がない」となると、平均正解率の高い組み合わせ（Telic と複合過去、Atelic と半過去、Stative と半過去、下記、表 1 の太字部分）はすべてのグループにとって、相対的に「得意な組み合わせ」と言えるのではないか。そして、その正解率の高さには、語彙アスペクト（下記、表 1 の「語彙 A」）と時制アスペクト（下記、表 1 の「時制 A」）の一致が影響している可能性がある。さらに、逆に、平均正解率の低い組み合わせ（Telic と半過去、Atelic と複合過去、Stative と複合過去）はすべてのグループにとって、相対的に「苦手な組み合わせ」と言えるのではないか。そして、その正解率の低さには、語彙アスペクトと時制アスペクトの不一致が影響している可能性がある。

	2 年生 66 名	1 年生 22 名	副専攻 39 名	語彙 A と時制 A
Telic と複合過去	82.6	74.3	63.7	一致
Telic と半過去	61.5	51.3	53.5	不一致
Atelic と複合過去	64.8	59.6	52.4	不一致
Atelic と半過去	82.9	78.9	63.4	一致
Stative と複合過去	50.0	63.6	46.2	不一致
Stative と半過去	79.0	75.2	57.6	一致
				分散の平均
分散	181.4	115.0	46.6	114.3
	Tukey	5%水準		
2 年生と 1 年生	0.68	4.34		
2 年生と副専攻	3.21			
1 年生と副専攻	2.53			

表 1： 3 つのグループの平均正解率

つぎに、平均正解率の傾向において、語彙アスペクトと時制アスペクトの 6 つの組み合わせのあいだに有意差が見られるかどうかを検証した。すべての組み合わせにおいて有意差は見られなかった。よって、例えば、Telic と複合過去の組み合わせの平均正解率の高さや、Stative と複合過去の組み合わせの平均正解率の低さは、偶然の産物かもしれない。

	Tと複	Tと半	Aと複	Aと半	Sと複	Sと半	
2年生 66名	82.6	61.5	64.8	82.9	50	79	
1年生 22名	74.3	51.3	59.6	78.9	63.6	75.2	
副専攻 39名	63.7	53.5	52.4	63.4	46.2	57.6	
							分散の平均
分散	89.7	28.7	38.7	106.3	84.4	130.5	79.7
	Tukey		Tukey		Tukey		5%水準
T複とT半	3.52	T半とA複	0.68	A複とS複	1.10		8.04
T複とA複	2.83	T半とA半	3.82	A複とS半	2.26		
T複とA半	0.30	T半とA複	0.42	A半とS複	4.23		
T複とS複	3.94	T半とS半	2.94	A半とS半	0.87		
T複とS半	0.57	A複とA半	3.13	S複とS半	3.36		

表2： 6つの組み合わせの平均正解率

ここから、語彙アスペクトと時制アスペクト（複合過去は完了、半過去は未完了）の6つの組み合わせがどのようなテキストの中に見られるのか、その例を提示する。

正解率の高い組み合わせ（例文中、太字になっている動詞部分。下線は複合過去、点下線は半過去を示す）

Telicと複合過去 40動詞：語彙アスペクトも時制アスペクトも完了

- 例：Nous **avons déménagé** parce que nos enfants **ont grandi**. 「子供たちが大きくなったので、引越した。」

grandir「大きくなる（＝育つ）」が複合過去 **ont grandi** で用いられ、子供たちがすっかり成長したことが含意される。そして、例えば、3人の子供それぞれに個室が必要になったので、これまでよりも大きな家へ引越すことになった、というような因果関係をあらわしている。このテキストの発話（もしくは記入）時点で、引越しが完了していることが、déménager「引越す」を複合過去 **avons déménagé** で用いることで含意される。

Atelicと半過去 11動詞：語彙アスペクトも時制アスペクトも未完了

- 例：Hier soir, vers minuit, j'ai entendu des chats qui **hurlaient** et qui **se battaient**. 「昨夜、真夜中ごろ、猫たちがうなったり、けんかしていたのを聞いた。」

hurler「うなる」と se battre「けんかする」が半過去で用いられ、始まりと終わりが明示されていない動作や、頻度不明の反復動作をあらわしている。結果、entendre「聞く、耳に入る」の複合過去 ai entendu という出来事が起きた時の状況と捉える事ができる。

Stativeと半過去 13動詞：語彙アスペクトも時制アスペクトも未完了

- 例：On a ouvert la fenêtre parce qu'on **avait chaud**. 「暑かったので、窓を開けた。」
- avoir chaud「暑い（と感ずる）」が半過去で用いられ、ouvrir「開く」という出来事が起きた時の状況をあらわしている。また、因果関係も含意される。

正解率の低い組み合わせ

Telicと半過去 7動詞：語彙アスペクトは完了、時制アスペクトは未完了

- 例：Tu **sortais la voiture du garage**. À ce moment-là, un pneu a éclaté. 「君が車を車庫から出そうとしたら、タイヤ(1つ)がパンクした。」

sortir la voiture du garage「車をが車庫から出す」は Telic 表現なので語彙アスペクトは完了だが、その動作が完了する前にタイヤがパンクした。よって、タイヤがパンクしたという出来事が起きた時の状況として半過去で用いられる。

Atelic と複合過去 9 動詞：語彙アスペクトは未完了、時制アスペクトは完了

- 例：Je n'ai pas travaillé de juin à octobre. 「私は 6 月から 10 月まで働かなかった。」(斜体部分は「期間限定」)

期間が明示されている表現には複合過去を用いる、というのは、複合過去の学習時によく説明される注意事項のはずだが、正解率は低かった。travailler「働く」の語彙アスペクトが未完了であることが原因の可能性もある。「参考語彙」として日本語で「6 月から 10 月まで」と問題文に付加していたので、期間限定がある場合には複合過去を使う、という規則が習得されていなかったのかもしれない。

Stative と複合過去 1 動詞：語彙アスペクトは未完了、時制アスペクトは完了

- Il a eu de la chance, il n'a pas payé de loyer pendant deux mois. 「彼は運が良かったので、2 ヶ月間家賃を払わなかった。」

avoir de la chance「運がよい」は、人間の状態をあらわし、いかなる変化も含意しない。この表現が複合過去 a eu de la chance で用いられ、「運が良かった」ことと「家賃を払わなかった」こととの前後関係、因果関係を含意している。

4.2. RQ2：正解率から学習者のグループ分けを行い、各グループの特徴を探る

学習者はそもそも学習時間で 3 つのグループに分けることができる。しかし、ここでは、学習時間を無視し、語彙アスペクトと時制の組み合わせについての正解率を基準に、学習者全 127 名のグループ分けを試みた。

まず、以下のような 3 つのグループに分けた。

- 正解率の観点で分けたの学習者グループ
 - G1：すべての組み合わせについて正解率が平均以上の 2 年生 5 名
 - G2：すべての組み合わせについて正解率が平均未満の 6 名 (1 年生 1 名と副専攻 5 名)
 - G3：組み合わせによって正解率が平均より高いことも低いこともある 116 名

G1 の 5 名は成績が相対的に優秀なので、このままフランス語学習を進めればよい。逆に、相対的に成績の低い G2 の 6 名には、複合過去と半過去に関するあらゆる学習項目の復習を勧めたい。

そこで、問題としたいのが、G3 に属する 116 名のうち、Telic と半過去、および、Atelic と複合過去、の 2 つの組み合わせの正解率が平均より低い学習者 (下記、表 3 の太字部分) である。この 2 つの組み合わせでは、語彙アスペクトと時制アスペクトが一致していない。そして、この 2 つの組み合わせの正解率がどちらも低い学習者は、Telic と Atelic の判別を誤っている可能性がある。彼らにこそ、語彙アスペクトの指導が有効かもしれないのである。

Telic と複合過去	56 名 (2 年生 20 名、1 年生 10 名、副専攻 26 名)
Telic と半過去	78 名 (2 年生 34 名、1 年生 17 名、副専攻 27 名)
Atelic と複合過去	61 名 (2 年生 27 名、1 年生 9 名、副専攻 25 名)
Atelic と半過去	58 名 (2 年生 21 名、1 年生 9 名、副専攻 28 名)
Stative と複合過去 この組み合わせの出現は稀	62 名 (2 年生 33 名、1 年生 8 名、副専攻 21 名)
Stative と半過去	58 名 (2 年生 19 名、1 年生 11 名、副専攻 28 名)

表 3：各組み合わせの正解率が平均より低い学習者

4.3. RQ3 : Labeau(2005)の語彙アスペクト3分類を検討する

Labeau(2005)の語彙アスペクト3分類が喚起する項目として、以下の4点があげられる。

- Telic は複合過去との組み合わせが多い
- Stative は半過去との組み合わせが多い
- Stative と複合過去の組み合わせは稀である
- Telic と Atelic の判別には動詞だけでなく補語や文脈が影響する

このことは、タスクに用いたのべ81動詞の語彙アスペクトと、いわゆる「正解の時制」の組み合わせの動詞数割合にも大きく影響していた。下記の表4にて、組み合わせごとにタスクで使用した動詞数を提示する。

語彙アスペクト	正解の時制	動詞数(合計 81)	平均正解率
Telic	複合過去	40	75.4
Telic	半過去	7	57.3
Atelic	複合過去	9	60.1
Atelic	半過去	11	76.2
Stative	複合過去	1	51.2
Stative	半過去	13	71.8

上記、表右端の「平均正解率」とは、学生全 127 名のもの

表4： 組み合わせごとの動詞数

ここで興味深いことが2点ある。1点目は、81動詞のうち、約半数の40動詞がTelicと複合過去の組み合わせで用いられ、その組み合わせにおける平均正解率が6つの組み合わせのうち一番高いことである(上記、表4の下線付き太字部分)。その逆が2点目である。わずか1動詞だけがStativeと複合過去の組み合わせで用いられ、その平均正解率が一番低いのである(表4の太字斜体部分)。本タスクを作成する際、各組み合わせの動詞数にはなんら操作を加えていない。よって、この6つの組み合わせの動詞数は、問題作成に利用した教材*Les exercices de grammaire A2*の中に見られる組み合わせを如実に反映していると言える。そこで、日本で出版されている26教材(名称等は「7. 26教材」参照)の複合過去、および、半過去の学習箇所、Stative verbの典型とも言えるavoirとêtreの2動詞が複合過去と半過去のどちらで提示されているのか、その頻度を調べてみたところ、êtreは複合過去で3回、半過去で25回用いられていた(下記、表5参照)。

	複合過去	半過去
avoir	6	12
être	3	25

表5： 26教材における、avoirとêtreの出現頻度

日々のフランス語学習で、学習者がよく目にする組み合わせとほとんど目にしない組み合わせがあると言えるのではないだろうか。このような語彙アスペクトの時制アスペクトの組み合わせに関する知識は複合過去と半過去の使い分けの学習に役に立つのではないかと思う。

5. まとめと今後の課題

語彙アスペクトと時制アスペクトの組み合わせの「得意」と「不得意」について、その一端は掴めたと考えるが、さらに、統計学的裏づけを強化し、客観性を追及していく必要がある。本調査で使用したタスクでは、語彙アスペクトと時制アスペクトの6つの組み合わせについて、動詞数が非常に偏ったものとなっていたので、その数を一定にしたタスクを用意し、追加調査を行う。また、語彙アスペクト分類が複合過去と半過去の学習に役立つ可能性があることを検証するために、学習者（例えば、1年生）を調査時に2グループに分け、コントロールグループに対してはLabeau(2005)の語彙アスペクト分類を説明してから調査を行う。そして、3ヶ月後、半年後、といった一定期間後にも調査を行い、学習の経過を縦断的に観察していきたい。

参考文献

- Andersen, R. (1991). Developmental sequences: the emergence of aspect markers in second language acquisition, in T. Huebner and C. A. Ferguson (eds.) *Crosscurrents in second language acquisition and linguistic theories*, Amsterdam: John Benjamins, 305-324.
- Bergström, A. (1997). L'influence des distinctions aspectuelles sur l'acquisition des temps en français langue étrangère, *Acquisition et interaction en langue étrangère*, 9|1997, 51-82.
- Garey, H. B. (1957). Verbal Aspect in French, *Language*, Vol. 33, No. 2. (Apr. - Jun., 1957), pp. 91-110.
- Labeau, E. et Larrivé, P. (2002). Les temps du passé français et leur enseignement, *Cahiers Chronos*, Rodopi B.V., Amsterdam.
- Labeau, E. (2005). Beyond the aspect hypothesis, *Tense-Aspect Development in Advanced L2 French*, Peter Lang AG, Bern.
- Salaberry, R. et Shirai, Y. (2002). The L2 Acquisition of Tense-Aspect Morphology, John Benjamins B.V.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*, Ithaca : Cornell.

26 教材（出版年順）

名称	著者	出版年	出版社
街角のフランス語(新訂版)	瀬戸秀一, 瀬戸和子	2002	朝日出版社
初めてのパリへの旅	渡辺美紀子, Joseph Mancel	2003	駿河台出版社
フランス語文法の<基礎>-新訂版-	太田浩一 他	2003	駿河台出版社
アルモニ	渡辺公子	2004	駿河台出版社
新・東京 パリ, 初飛行	藤田裕二 他	2004	駿河台出版社
新・パシヨネマン 1	阿南婦美代, セシル・モラン	2004	第三書房
クリック! クリケ! 2年目のフランス語 - セ			
マスター制対応・復習から発展へ-	中村敦子, 加藤行男	2005	第三書房
ヴィット フェ・ビヤン フェ!	安田悦子	2006	白水社
オレイユ・タンデュ	岩田好司 他	2006	駿河台出版社
	田中良, マリー・フランソワーズ・バル		
さわやかフランス	ドウ鎌田	2006	朝日出版社
新デパール	中山眞彦	2006	白水社
	中島弘二, マリー＝フランス・デルモ		
パルクール	ン保坂	2006	白水社
ラピッド・フランス語 II	加藤雅都	2006	駿河台出版社

ゲームの規則-フランス語入門-	伊藤洋司 他	2007	駿河台出版社
サン・ファッソン	クリスチャン・ポームルー, 高橋信良	2007	朝日出版社
新カイエ・ドゥ・フランセ	内藤陽哉	2007	駿河台出版社
パシヨネマン 2	阿南婦美代, セシル・モラン	2007	第三書房
ユピー!	黒田恵梨子 他	2007	朝日出版社
ニヴォーカトル-教室で学ぶ仏検 4 級	富田正二	2008	駿河台出版社
はてな君とフランス語でおしゃべり	Olivier Lorrillard, 小田涼	2008	駿河台出版社
フランス語のナビ	照木健 他	2008	第三書房
メビウス	甲斐基文	2008	第三書房
エマのフランス	Noémie Daniel, 黒木朋興	2010	駿河台出版社
シートで覚えるフランス語入門-5級・4級仏 検ゲット!-	石川光一, 石川弘子	2013	駿河台出版社
名句で学ぼう! 初級フランス語	柏木隆雄 他	2013	朝日出版社
ラ・トゥール-フランス語初級文法と会話-	山口俊洋 他	2013	駿河台出版社